電子媒体における「フィラー」

落合　哉人

キーワード：フィラーの出現傾向、LINE テキストチャット、ブログ、「まあ」

要　旨

本稿では、これまで中心的に検討がなされてこなかった文字で書かれる「フィラー」について、LINE と実際の会話、ブログ、実況動画の 4 つのデータを取り上げて調査及び分析を行った。その結果、電子媒体（LINE、ブログ）における「フィラー」の出現位置として、文頭・発話頭に偏る傾向があることや、一方で「フィラー」の担う役割・機能に着目した場合、LINE では「対人関係に関わる機能」に、ブログでは「テクスト構成に関わる機能」に、それぞれ特化することが明らかになった。また、個別の語に対する考察として電子媒体で出現数が最も多い「まあ」を取り上げ、この語の頻出の背景に役割・機能の側面で汎用的であることや、話題をまとめ、それ以上展開させない性質を持つことがあることを論じた。本稿の検討からは、文字で書かれる「フィラー」も一様ではなく、出現環境と語の性質の双方について広く分析を行う必要があることが示唆される。

1. はじめに

実際の発話においてしばしば出現するフィラーには、単なる「言いよどみ」という側面に留まらず、「ターンの維持」や「発話の和らげ」など、談話の運営に関わるいくつかの側面があることがこれまで、山根(2002)など多くの論考で指摘されてきた。たとえば、(1)において、話し手(F149)は一度、「で（ー）」と口に出してしまってから、自らが示したい適切な語彙が思い出せなかったため、「その（ー）」、「あの（ー）」、「えー」といったフィラーを用いることで間をつないでいると考えられるが、このことは聞き手に自らの発話を続ける意思を示すことにもつながっている。

(1) （コンピューターについて）

F149：私も、だから、お姉ちゃん買うらしいんだわー。

（そうなんだ）うん、あのほら、インターネットホームページ作りたいとか言って。

でー、そのー、あのー、何だっけ、えー、ディスプレイがついてる、何だ、何ていうんだっけ、そういうの。 （NUCC, 011）

また、(2)において、話し手(F149)は自らが言及している対象（番組）と聞き手がそれまで言及していた対象（番組）が異なるものであることを示している。話し手(F149)の発話頭に置かれた「何か（なんか）」は、そのような対立の明示を和らげる側面を持つとともに、後続文脈の方向性を聞き手に伝達する側面も担っている。

(2)（テレビの音楽番組について）

F069：私も聞いてないけども、ポルノと ELT 聞いてうーんって感じ。

F149：何かね、違う、土曜日にやってなかった？ （NUCC, 011）

(1)及び(2)のように、実際の発話において、フィラーがしばしば用いられる背景には、音声による情報伝達の性質が深く関わることが推測される。音声を介したコミュニケーションでは、一度にまとまった情報を提示できないため、特定の内容を順序立てて伝達する過程でフィラーが生じ、話し手にとっても聞き手にとってもやりとりそのもの、あるいは発話のあり方を把握（または再確認）することにつながると考えられる。

一方で、フィラーは一度にまとまった情報を提示できる、文字による情報伝達の際にも用いられることがある。特に、近年の電子媒体（メール、ブログ、テキストチャット、SNS など）における発信では、(3)のようにしばしば情報伝達の上で必須とは言い難い要素を書き添える様子が見られる[1]。従来、日本語のフィラーを対象とする研究では、実際の音声発話におけるフィラーの種類や機能について、多くの議論がなされてきたものの、十分にことばを練る時間があるはずの環境において意識的に書かれるフィラー的要素については、未だ具体的な検討に乏しい。

[1] なお、文字によってこのような要素を書き添える特徴は電子媒体に限らず、雑誌などの出版物においても確認されている（佐竹 1980）。但し、出版物において執筆・編集に携わる限られた者が関わる言語行動と、電子媒体において一般に広くなされる言語行動とでは、十分に観察できる質・量ともに異なりがあると考えられるため、本稿では後者における言語行動のみを念頭に置く。

(3)（楽器の音の出し方について）
A：クラはマジでいみわからんかった
B：うーん、なんなんだろ
　角度とか悪かったんじゃね　（LINE, 012）

そこで本稿では、電子媒体における「フィラー」[2]の分析を通して、文字で書かれる「フィラー」の特徴の一端を探る。具体的には、文字を用いた LINE テキストチャット（以下、「LINE」）及びアメーバブログ（以下、「ブログ」）における発信と、音声を用いた実際の会話及びゲーム実況動画（以下、「実況動画」）における発話との比較から、電子媒体における「フィラー」の発話中における位置や談話上の役割、媒体ごとの現れ方の異なりなどについて、検討を行う。

本稿の構成は以下の通りである。まず、2 章では日本語のフィラー全般に関する研究と、意識的に用いられる「フィラー」に言及する研究というふたつの観点から先行研究を概観する。次に 3 章では、電子媒体において文字で伝達される「フィラー」と、実際場面（会話・実況動画）において音声で伝達されるフィラーについて調査を行い、結果を分析する。続く 4 章では、3 章を踏まえ、個別の語「まあ」の現れ方から電子媒体における「フィラー」について考察を行う。最後に、5 章では本稿をまとめ、今後の展望を述べる。

2. 先行研究

2.1 フィラー全般に関する研究

従来の日本語のフィラーを対象とする言語研究のアプローチは、大工原(2010)など近年の論考でも概説がなされる通り、主に自然談話における実際の出現例から、種類や頻度、機能などを解明しようとする野村(1996)や山根(2002)などのアプローチと、作例に基づいて個々のフィラーの働きを人間の心の働きとの関連で説明しようとする定延・田窪(1995)や冨樫(2001)などのアプローチに分けることができる。このうち、特に

[2] 本稿では、音声発話におけるフィラーはそのままフィラーとして、文字によって書かれるフィラー的要素は括弧を付けた「フィラー」として、書き分けることにする。

後者では感動詞を中心とするフィラー[3]を心的操作の標識として捉える談話管理理論に基づく研究が多く、個々のフィラーの性質について、様々な議論がなされている。但し、本稿は電子媒体という、フィラーが発せられる位相自体に着目して出現傾向を調査するため、ここでは前者のアプローチをとる野村(1996)と山根(2002)を取り上げる。

まず、野村(1996)は、フィラーを「本来の語彙的な意味から離れて用いられ、それを削除しても発話全体の命題的な意味が変わらないような語句」（下線は原文ママ）と定義した上、大学の文科系講義と理科系講義を対象に出現傾向の調査を行っている。その結果、フィラー全般の出現頻度（発話数あたり）は文科系講義の方が理科系講義よりも 2 倍以上高いものの、個別の語に着目すると、聞き手への働きかけのあるフィラーの出現全体に占める割合は理科系講義の方が文科系講義より 2 倍以上高いという傾向があることを明らかにしている。また、発話境界（発話頭・発話末）に現れるフィラーや、換言・修正等をマークするフィラーの出現傾向について分析を行い、それらも文科系講義より理科系講義の方が出現全体に占める割合が高いことを示している。さらに、分析を踏まえ、（フィラーに関する限り）文科系講義と理科系講義とではわかりやすさに関して質の違いがあることを指摘している。野村(1996)の調査は、談話ジャンルや媒体といったフィラーが用いられる位相に着目する点で先駆的なものであると考えられる。但し、出現傾向を算出する際の「発話」の数え方や「聞き手への働きかけ」の基準など、十分に説明がなされていない点も多い。

次に、山根(2002)は、フィラーを「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係を持たない、発話の一部分を埋める音声現象」と定義した上、講演・留守番電話・実際の対話・電話の 4 つの場面を取り上げてそれぞれ調査を行っている。また、調査結果について、種類と音声、出現位置、役割、発話者の属性といった観点から分析を行い、すべての場面において発話途中のフィラーが最も多いことや、一方で留守番電話と電話では発話途中のフィラーが 5 割程度であるのに対して、講演では 9 割を占めること、談話がなされる場の改まり度や話者の属性（性別や年齢）もフィラーの出現傾向に影響することなどを明らかにしている。その上で、分析を踏まえ、「話し手の情報処理能力を表出する機能」「テクスト構成に関わる機能」「対人関係に関わる機能」の 3 点をフィラーの中心的機能として提示している。山根(2002)における調査は、「音声現象」という定義が示す通り、本稿で取り上げるよう

[3] フィラーと見なされる語群と品詞としての感動詞がどの程度重なるかについては先行研究によって立場が分かれる。この点に関して、本稿では必ずしも感動詞のみがフィラーとは考えない立場をとることをあらかじめ断っておく。本稿でフィラーと見なす語彙については 3.2 で後述する。

な文字で書かれる「フィラー」が念頭に置かれていないものの、話し手や聞き手といった、談話参加者同士の物理的交流の有無や、対話か否かといった談話のあり方に着目してフィラーを観察している点で参考になる。

自然談話の観察に基づく研究は、ほかにもフィラーそのものに関する先駆的な研究である塩沢(1979)や山下(1990)などいくつか挙げられるが、個別の語に留まらずフィラー全般を対象に具体的な分析を行う論考は上述の野村(1996)と山根(2002)を除くと、それほど多くない。その理由として、これまでにも多くの研究で言及がなされてきた通り、どのような語をフィラーと見なすかについて未だ定義が曖昧であることが挙げられる。たとえば、機能上の観点では「言いよどみ」としての性質のみに着目する立場（小磯ら 2004 など）から、伝達される命題に関わりを持たないものすべてを扱う立場（野村 1996 など）まで幅広い。また、品詞論的な観点でも、感動詞のみが該当すると考える立場（大工原 2010 など）から、副詞など別の品詞に該当すると考えられる語も扱う立場（山根 2002 など）まで論によって異なりが見られる。本稿ではこのような、フィラーという概念の定義に関する問題について十分な検討を行うことは目指さないものの、少なくともなるべく詳しく扱う語について規定を設けることとする。

2.2 文字で書かれる「フィラー」に関する研究

従来の日本語のフィラーに関する研究では、基本的に実際の音声発話のみが念頭に置かれてきたため、意識的に文字で書かれる「フィラー」を中心的な対象とする分析は管見の限り、ほとんどなされていない。但し、そのような「フィラー」に関する周辺的な言及・分析は、定延(2002, 2005)、定延・田窪(1995)、川田(2008)、川上(1992)、小出(2009)など、従来の研究においてもなされているため、簡潔に取り上げる。

まず、定延(2002)は、前節で触れた談話管理理論の立場に基づいてフィラーとしての「そう（だなあ）」を検討する論考であり、この語が「さまざまな候補から最適なものを求める検討の最中であることを示す」標識であることや、ときにはそのような検討中の姿勢を見せるためにあえて用いられることを分析している。また、「そう（だなあ）」のように談話運営上意図的に用いられるフィラーを、「あからさまに儀礼的なフィラー」と呼んでいる。さらに、定延(2005)では、定延(2002)における分析をより広く捉える形で、フィラーが必ずしも心内行動に伴って発せられるわけではなく、表現効果目当てに使われる場合があると指摘している。

このような、「言いよどみ」という範囲に留まらず、フィラーには表現効果をねらって意図的に用いられる場合や、「儀礼的に」使用される場合があるとする考え方は、

定延・田窪(1995)や川田(2008)でも共通している。それらのうち、定延・田窪(1995)は後続する定延(2002, 2005)同様、談話管理理論に基づいて感動詞の分析を行う論考であり、特に「えーと（ええと）」と「あの（ー）」について心内の演算領域の確保と言語編集という側面から検討を行っている。一方で、「話し手は、「ええと」や「あの（ー）」を使いながら、実際に演算領域確保や言語編集をおこなっているとは必ずしも限らない」とも述べた上、態度の「表出」目当てにそれらの語が発せられる「逸脱」が起こり得ることを指摘している。また、川田(2008)は定延・田窪(1995)におけるそのような指摘を踏まえ、話し手自身を指向するフィラー（実際に何らかの心内処理が行われ、「現れるフィラー」（川田 2008: 153））と聞き手を指向するフィラー（特定の意図の伝達を目当てに意識的に「使われるフィラー」（川田 2008: 153））の存在を話し手の視線との関係から検討している。特に、「指示詞型フィラー」（「あの（ー）」「その（ー）」など）と「えー型フィラー」（「えー」「えーと」など）を対象に調査を行った結果[4]、「えー型フィラー」を発する際には話し手の視線が聞き手に向いていないことが多く、反対に「指示詞型フィラー」を発する際には視線が聞き手に向いていることが多いことから、「えー型フィラー」は自己指向性が高く、「指示詞型フィラー」は他者指向性が高いと述べている。

個別のフィラーに関しては上記で挙げた論考以外にも、川上(1992)が「なにか（なんか）」について、「婉曲」「責任回避」「注意喚起」「雰囲気の共有」といった表現効果があり、聞き手を意識して表出されるということを論じているほか、小出(2009)が「えーと」について、必ずしも心内処理を示すわけではなく、「談話行動プランを切り替えるとき」（「新たな話題へ移る」「対話の相手を替える」など）に用いられることを分析している。

以上のように、談話において話し手がフィラーを発する際、何らかの表現効果の伝達を意図することに言及する論はいくつかあるが、どの論においても検討の対象は音声発話のみであるため、意識的に表出されるフィラーと無意識に出現するフィラーを厳密に切り分けることに成功しているとは言い難い。また、前節冒頭の分類に従うならば、（川田 2008 などを除いて）上述したほとんどの論が作例あるいは限られた少数の実例を根拠として仮説演繹的に個別のフィラーの性質を導くアプローチをとるため、言及される語が限られているという問題もある。一方で、電子媒体においてしばしば

[4] そのほか、川田(2008)では「まー型フィラー」（「まあ」「まっ」など）も調査の対象に含めているが、「「えー型フィラー」と傾向が似ている程度で、大きな特徴が見られなかった」と述べた上、分析の対象から外している。

観察される文字を用いた「フィラー」は基本的に意識的に表出されるものであると考えられ、そのような要素を中心的に観察することは、先行研究における意識／無意識という対立を克服する可能性を秘めている。そこで、以下では実際に電子媒体における「フィラー」を音声発話におけるフィラーと比較する形で幅広く収集し、出現傾向に基づいて文字で書かれる「フィラー」全般の特徴を探ることとする。

3. 調査

先行研究を踏まえ、本章では、電子媒体において文字で書かれた「フィラー」について調査及び分析を行う。3.1 では調査対象について、続く 3.2 では扱う語彙と調査の内容について、それぞれ詳細を述べる。また、3.3 では調査結果と分析を示す。

3.1 対象とするデータ

まず、本稿で扱うデータについて述べる。本稿では、文字で書かれた「フィラー」を調査するにあたり、若者同士の LINE 上の雑談 36 件（計 4524 発信／4824 文[5]）とアメーバブログ（http:ameblo.jp/）における若者による記事 200 件（計 3841 文）を扱う。

データの詳細として、LINE に関しては 2014 年 5 月から 2017 年 9 月にかけて関東地方の複数の大学に所属する学生及び、20 代前半の社会人からスマートフォンのスクリーンショット（端末上の画面を写した画像）で 15～20 枚程度の分量のやりとりを収集した。その上で、集まった 70 件程度の話者の重複しないやりとりのうち、特に「予定の取り決め」や「事務連絡」、「業務に関する相談」などの課題の遂行がなされていない友人同士の雑談を抽出して用いることとした[6]。また、アメーバブログに関しては 2016 年 9 月 1 日から 10 月 31 日にかけて、ハッシュタグ「大学生」を付けて更新された記事の収集を行った。収集の際にハッシュタグを利用した理由として、元となるブログの重複を避け、書き手の多様性を確保できることが挙げられる。なお、記事

[5] 本稿で扱う各データの総文数について、LINE 及びブログで句点が使用されない内容については、動詞などの終止形・命令形及び助動詞や終助詞の使用を目安に認定を行ったが、言いさし文など、判断が分かれる可能性があるものは筆者を含めた日本語母語話者 3 名で認定を行った。この処置は後述する実況動画の書き起こしデータでも同様である。一方で、同じく後述する実際の会話については基本的にコーパス上の句読点に従って文を数えた。なお、LINE とブログにおけるスタンプ、絵記号、URL、画像や、実際の会話における明らかなあいづちはデータに含めていない。

[6] 但し、本稿で扱うデータの中には雑談の最中に挿入される形で一部、課題が生じているものもあるため、そのような部分は一律に調査の対象外とする。これは後述の実際の会話も同様である。

の内容は基本的に日々の記録を行う「日記」に限定した上、明らかに営利目的であるものや、書き手が大学生ではないと思われるものは省いた。

一方で、本稿では電子媒体における発信との比較対象として、『名大会話コーパス』（NUCC）における若者の友人同士の雑談 10 件（計 541 分／12049 文）と、ニコニコ動画（http:www.nicovideo.jp/）におけるゲーム実況動画（ゲームで遊びながら、その所感について口頭で述べる動画）の書き起こしデータ 15 件（計 298 分／3968 文）についても調査を行う。これらのうち、前者は上述した LINE 上の発信と対をなす、特定の相手の見える直接的な対話として、後者はブログ上の発信と対をなす、特定の相手の見えない間接的な対話として、それぞれ捉えられる。

具体的なデータの収集方法として、コーパス上の会話データに関しては、「20 代前半～後半の若者によるもの」「友人同士の雑談」「40 分以上 60 分未満のもの」という 3 点の条件を設けた上、合致する談話をデータセットにおいてあらかじめ割り振られた番号の若い順から 10 件抽出した。また、実況動画に関しては、2017 年 1 月 30 日の時点でニコニコ動画 web サイト上において、ハッシュタグ「実況プレイ動画」を付けて投稿がなされた動画のうち、閲覧回数が最も多いものから順に検索結果 3 ページ目までを取り上げた[7]。動画の長さは平均して、20 分程度である。

実際の会話におけるフィラーの出現傾向は、前章で触れた山根(2002)でも既に調査がなされている。但し、そこでの調査対象の多くは 50 代以上の話者によるデータであること（さらには、話者の属性もフィラーの出現傾向に関わる可能性が示唆されること）や、次の 3.2 で後述する通り、本稿でフィラー（「フィラー」）と見なす語の認定基準が山根(2002)の基準と一部異なることなどを踏まえると、LINE 上の若者同士の談話との厳密な比較は難しい。そのため、本稿では実際の会話についても、コーパスをもとに改めて調査を行うことにした。また、LINE 及びコーパス上の実際場面における談話が特定の相手がいる対話として認められるのに対して、ブログ上の発信では特定の相手を想定しにくいにも拘わらず、対他性のある文体が用いられる[8]。従って、ブログ記事も不特定多数の聞き手を想定した間接的な対話と捉えた方が適切であると考えられ、実際場面の独話と比較を行うことは妥当とは言えない。本稿において、

---

[7] その際、特定のキャラクターになりきって発話を行うものや、二人以上の話者がいるもの、話者の重複があるものは省いた。なお、実況動画における話者の年齢は基本的に非公開であったが、動画内の発話内容から、概ね 10 代後半～20 代前半の大学生が中心であることが窺える。

[8] 例として、「～ですよね」「～なんですよ」といった丁寧体、終助詞の使用などが挙げられる。このようなインターネット上の日記で見られる表現は、岸本(2005)などでも分析がなされている。

ブログ記事との比較対象として、実況動画を選定した理由は、両者に基本的な情報伝達が音声か文字かという異なりはあるものの、発話（発信）を準備する時点では他者からの明確なレスポンスが見えず、投稿が終わった後にコメント欄にコメントが書き込まれることによって他者とのつながりが生まれるという性質が共通するためである。

山根(2002)は、情報の流れが一方的か双方向的かという側面からフィラーの分析を行っているが、すべての調査対象が音声発話であるため、フィラーが出現する際の意識／無意識の対立までは検討していない。この点に関して、以上の 4 種類のデータを取り上げることで、意識的に文字で書かれる「フィラー」にはどのような特徴が見られるか具体的なデータが得られることと、さらにはそのような「フィラー」の環境ごとの現れ方の差も観察できることが本稿の調査の有意義な点として挙げられる。

3.2 語の認定基準と調査の観点

次に、本稿でフィラー（「フィラー」）と見なす語の認定基準について述べる。前章で触れた通り、これまでの研究では、自然談話の観察に基づく論においても、作例に基づく論においても、どのような語をフィラーと見なすかについて統一的な見解が得られているとは言い難い。そこで、本稿ではそのような問題の根本的な解決は目指さないまでも、以下①～③の条件に合致する語を暫定的に扱うこととする。

①山根(2002)や小磯ら(2004)において、フィラーとして扱われている語。但し、そのほか、一部のあいづち詞・応答詞的な語も扱う。
②本来の語彙的な意味から離れて用いられ、それを削除しても発話の命題が変わらない語。但し、石黒ら(2009)で接続表現とされる語や、明らかにあいづちである語、具体的な意味内容を持つ語、疑問文に対して肯定・同意や否定を示す語は除く。
③LINE 及び実際の会話において、単独でターンを構成する語は除く。

上記①は従来の研究のうち、最も広い範囲かつ具体的にフィラーと見なす語を示していると考えられる山根(2002)及び小磯ら(2004)に本稿の調査が依拠することを示す。なお、山根(2002)ではあいづち詞・応答詞としての「あ」「はい」「うん」などをフィラーとして見ていないが、あいづちや応答であるか否かという判断は談話参加者同士の共在に基づく、視覚的・音声的側面によって可能になるところも大きい。たとえば、文字のみを手掛かりとする場合、(4)及び(5)のような電子媒体における「フィラー」の線引きは（発信者の意識としては異なりがあるにしても）難しいと言える。

(4)（芸能タレントの契約終了を伝えるサイトへの URL が提示されたことに対して）
B：あーーーでも個人事務所なんですね、それならまあ納得　（LINE, 033）
(5)（A の知り合いの写真を探すよう言われたことについて）
B：そっちのがめんどくさくねーw
A：もう外出てるし
B：ああ
B：アルバムなの　（LINE, 003）

従って、本稿の調査では文脈によって十分に判断を行えない場合、あいづち詞や応答詞に分類され得る語もフィラー（「フィラー」）として収集を行う。これは、電子媒体だけでなく、実際の会話や実況動画におけるデータを検討する際も同様である。また、以上の理由から山根(2002)及び小磯ら(2004)に挙げられていない語として、「はー」「へー」「ほう」「あれ」（「あれ」「あれですか」「あれでしょう」）「ほら」についても収集を行う。本稿で扱う具体的な語彙を表 1 にまとめる。

表 1　本稿の調査で扱う語彙（（）内は同語と見なす。）

あ、い、う、え、お、あー、いー、うー、えー、おー、えーと（えっと）、こう、そう、この、その、あの、なんか（なんていうか等）、ねー（ね）、いやー（いや）、はい、うん（ん）、ほん（ほーん）、ふん（ふーん）、まあ（まっ）、もう、ほら、うーん（うーんと、んー等）、はー、へー、ほう、あれ（あれですか、あれでしょう等）

次に②は、山根(2002)や小磯ら(2004)に留まらず、従来の多くの研究において、フィラーという要素が具体的な意味内容を持たず、発話を通して伝達される情報の命題にも関与しないものと見なされる点では少なくとも一致を見ていることを踏まえるものである。但し、フィラーと同じくそのような条件を満たす接続表現や、文脈上あるいは出現環境に基づいて明らかにあいづちであると判断される語[9]は調査の対象からできる限り除くこととする。また、そのほか、明らかに特定の指示対象を含意すると考えられる「こう」「そう」「この」「あの」「なんか」「あれ」などの語や、明確な肯定・同意や否定を含意すると考えられる「そう」「うん」「いやー」「うーん」などの語も、具体的な意味内容を持つものと判断し、収集を行わない。

[9] 特に、コーパス上の実際の会話において、話し手の発話に重なるような形で表記がなされている話し手以外の発話は基本的にあいづち相当と見なす。

最後に③は、②で示したような「具体的な意味内容を持たず、伝達される情報の命題にも関与しない語」を確実に収集するための便宜的な配慮を示すものである。勿論、実際には、やりとりにおいてフィラーが単独でひとつのターンを構成することはあり得る。たとえば、(6)における下線で示された部分は、何かを述べようとしたものの、はっきりと言語化することができず、結果として、フィラーのみが発せられたものである可能性がある。但し、そのような心内における動きは後続文脈が明示されていない場合、基本的に観察しにくいことが想定される。従って、本稿では、①②に準じない収集対象外の語との区別が付かなくなる可能性をなるべく避けるため、フィラーが発せられただけで話者交替が行われている部分を対象に含めないことにした。

(6)（お化け屋敷の怖さについて）
F034：びっくりと怖いってのは、やっぱ違うよね。
M015：あー、あー、あー、そういう意味ね。
M034：そういうのとかってなんだけど。
M015：怖くはないもんね。
M004：うーん。
M034：心霊スポットとか。（NUCC, 081）

以上、本稿で扱うデータ及び収集するフィラー（「フィラー」）の詳細を述べたが、調査において具体的に着目する観点として、種類と出現位置、談話上の役割の 3 項目を挙げる。山根(2002)では、そのほか音声面と話者の属性も分析項目として取り上げているが、前者に関しては先に述べた通り、書き起こしデータを扱う際に十分に観察できない都合上、検討を行わない。一方で後者に関しても、特にブログにおいて書き手の性別が不明であることが多いことを踏まえ、分析しないものとする。なお、フィラー（「フィラー」）の出現位置に関して、本稿の調査では基本的に「文頭」「文中」「文末」のどの位置における出現であるかを中心的に検討するが[10]、話者の役割交替が行われる LINE と実際の会話ではそれらに加えて、「発話頭」（役割交替の直後）と「発話末」（役割交替の直前）の区切りも設ける。また、フィラー（「フィラー」）が連続して複数用いられる例に関しては、すべて同じ位置に生じたものとして扱う。

[10] コーパス上の実際の会話において、フィラーの前後に句点が用いられる表記がなされている場合は、文脈から、その直前の文末あるいは直後の文頭に割り振る。

その際、直前の語の延伸または直後の語の「つっかえ」と考えられる語は収集しない。また、同語の反復も「つっかえ」と考え、一語として数える。

3.3 調査結果と分析

調査結果は表 1 から表 4 の通りである。

表 1　LINE における「フィラー」

	発話頭	文頭	文中	文末	発話末
あ	18	9	0	0	0
え	36	3	0	1	0
お	3	1	0	0	0
あー	27	2	0	0	0
えー	10	4	0	0	0
おー	11	3	2	0	0
えーと	2	0	0	0	0
こう	1	0	1	0	0
あの	0	1	0	0	0
なんか	21	9	4	0	0
ねー	6	6	0	0	1
いやー	1	1	1	0	0
うん	3	1	0	1	5
まあ	28	20	5	0	0
もう	3	3	4	0	0
うーん	11	2	0	0	0
はー	1	0	0	0	1
へー	2	0	0	0	0
ほう	7	0	0	0	0
あれ	2	1	0	0	0
計	193	66	17	2	7

表 2　実際の会話におけるフィラー

	発話頭	文頭	文中	文末	発話末
あ	242	96	53	0	1
う	1	0	0	0	0
え	113	40	18	0	9
お	3	2	1	0	0
あー	192	24	23	2	2
うー	3	0	0	0	1
えー	56	9	12	1	1
おー	5	1	1	0	0
えーと	7	5	16	0	2
こう	9	13	185	6	12
そう	17	23	21	2	6
この	0	0	9	0	1
その	2	11	86	0	4
あの	41	58	169	0	6
なんか	129	138	488	15	37
ねー	38	18	26	3	7
いやー	20	9	2	0	1
はい	1	5	0	0	3
うん	47	39	61	42	61
ふん	51	4	3	6	9
まあ	40	48	99	0	1
もう	52	36	111	7	29
ほら	9	5	19	0	2
うーん	184	26	23	9	21
はー	19	5	3	0	2
へー	45	3	1	2	10
ほう	2	0	0	0	0
あれ	22	12	21	4	1
計	1350	630	1451	99	229

表 3　ブログにおける「フィラー」

	文頭	文中	文末
あ	5	4	0
え	0	1	0
あー	2	2	0
えー	3	0	2
えーと	0	1	0
そう	4	0	0
なんか	10	4	0
いやー	8	0	0
はい	4	0	2
うん	1	1	1
まあ	40	7	0
もう	5	0	0
ほら	1	0	0
うーん	6	2	0
はー	2	0	0
ほう	1	1	0
あれ	2	0	0
計	94	23	5

表 4　実況動画におけるフィラー

	文頭	文中	文末
あ	93	55	0
う	2	1	0
え	59	29	0
お	60	20	0
あー	78	42	0
うー	1	0	0
えー	126	221	0
おー	55	32	0
えーと	19	24	0
こう	2	15	0
そう	0	4	0
この	7	20	2
その	1	10	0
あの	14	72	0
なんか	42	59	1
ねー	15	8	7
いやー	17	6	0
はい	69	17	62
うん	21	7	20
ほん	1	0	0
ふん	3	1	0
まあ	100	193	2
もう	30	44	5
ほら	5	3	1
うーん	23	7	1
はー	18	3	0
へー	4	0	0
ほう	9	0	1
あれ	24	5	2
計	898	898	104

調査の結果、本稿で扱った LINE 上の発信では 4824 文から 20 種類（のべ 285 語）、ブログ上の発信では 3841 文から 17 種類（のべ 122 語）の「フィラー」が確認された。一方で、実際の会話では 12049 文から 28 種類（のべ 3759 語）、実況動画では 3968 文から 29 種類（のべ 1900 語）のフィラーが確認された。総文数あたりの出現頻度は LINE で 5.9%、ブログで 3.2%、実際の会話で 31.2%、実況動画で 47.9%である。

3.3.1 「フィラー」の種類

まず、「フィラー」の種類に着目して分析を行う。個別の語の観点では、本稿の調査で扱った LINE とブログ双方のデータにおいて「まあ」が最も多く用いられていた（LINE では 53 語、ブログでは 47 語）。但し、LINE では「え」や「なんか」など、それ以外の語も一定数確認されたのに対して、ブログでは「まあ」の次に多く出現が確認された「なんか」がのべ 14 語であり、語ごとの、総文数／「フィラー」出現全体に占める出現頻度には極端に偏りが見られた。また、電子媒体で確認された「フィラー」の種類と実際の会話及び実況動画で確認されたフィラーの種類を比べると、電子媒体では指示詞由来の語（「この」「その」「あの」「こう」「そう」）の「フィラー」の出現が比較的少ないという特徴が観察された（LINE において「あの」が 1 例、「こう」が 2 例確認されたほか、ブログにおいて「そう」が 4 例確認されたのみ）。

出現が確認された各フィラー（「フィラー」）の出現数全体に占める割合のうち、上位 5 語を表 6 にまとめる。

表 6　電子媒体及び実際場面における語ごとの割合*

LINE		実際の会話		ブログ		実況動画	
語	割合	語	割合	語	割合	語	割合
まあ	18.6%	なんか	21.5%	まあ	38.5%	えー	18.3%
え	14.0%	あ	10.4%	なんか	11.5%	まあ	15.5%
なんか	11.9%	あの	7.3%	あ	7.4%	あ	7.8%
あー	10.2%	うーん	7.0%	いやー	6.6%	はい	7.8%
あ	9.5%	うん	6.7%	うーん	6.6%	あー	6.3%

*フィラー（「フィラー」）出現全体あたり。小数第 2 位を四捨五入。

3.3.2 「フィラー」の出現位置

次に、「フィラー」の出現位置に着目して分析を行う。本稿の調査において、実際の会話と実況動画では、文中におけるフィラーも文頭及び発話頭におけるフィラーと同程度出現していたのに対して、LINE とブログでは、ほとんどの「フィラー」が文頭あるいは発話頭において出現していた（LINE では 90.9%、ブログでは 77.0%）。先に示した語の認定基準及び調査結果からもわかる通り、本稿では、基本的に文頭で用いられやすいと考えられる「あ」や「え」、「へー」などの語も「フィラー」と認め収集を行っているが、そのほか比較的出現位置が自由であると考えられる「なんか」

や「うーん」などの語も文頭に偏って出現する傾向は、文字によって書かれる「フィラー」の特徴の一端を示すものであると言える。

表 7 に位置ごとのフィラー（「フィラー」）出現の割合をまとめる。

表 7　電子媒体及び実際場面における位置ごとのフィラー（「フィラー」）の割合*

	発話頭	文頭	文中	文末	発話末
LINE	67.7%	23.2%	6.0%	0.7%	2.5%
実際の会話	35.9%	16.8%	38.6%	2.6%	6.1%
ブログ		77.0%	18.9%	4.1%	
実況動画		47.3%	47.3%	5.5%	

*フィラー（「フィラー」）出現全体あたり。小数第 2 位を四捨五入。

なお、電子媒体において総体的に出現の少ない文中における「フィラー」と文末あるいは発話末における「フィラー」を詳細に見ると、文中では(7)のような引用内部や(8)のような接続詞の直後、または(9)のような接続助詞の直後における出現が多かった（LINE では 17 例中 11 例、ブログでは 23 例中 16 例が該当）。

(7)（夏休みの過ごし方について）
海にもプールにも、夏祭りにも花火大会にも行かず、夏らしいことをしましたか？と問われたら、
「うーーーんアイスいっぱい食べたかな。」
と答えるしかない笑　（【引用内部】／ブログ, 126）

(8)（B が少し前に草津に旅行に行ったという話に対して）
A：B ちゃーん！
私明日草津行くんだけど、どこの饅頭が一番美味しかった？笑
B：全部食べた！
B：ってかなんか久しぶり！笑[11]　（【接続詞の直後】／LINE, 014）

(9)（大学の知人が他人の服に文句を言ってくることについて）
今日は肩のことなんで、、、
えっと、、、
形ですかね(?)　（【接続助詞の直後】／ブログ, 116）

[11] (8)におけるここでの言及はしばらくやりとりに間が生じていたことに対するものである。

また、文末あるいは発話末では、(10)(11)(12)の 3 例を除き、ほかのすべての例が「動詞の終止形・意志形」及び「形容詞・名詞+コピュラ」あるいは、それらに終助詞「な」「ね」「よ」が付加された文形に連なる形で出現していた。

(10)（A が B を教室で見かけたことについて）
B：さっきまでおった
B：本命チョコもらっとった
A：やっぱり～ってえっ？ （LINE, 016）
(11)（共通の知人 O が O の後輩に食事の誘いを断られたことについて）
B：（O の Twitter における発言を写したスクリーンショット）
B：そりゃあ、O から誘われたら、ねえ。 （LINE, 035）
(12)（学園祭に行ってきたことについて）
今日から学園祭が始まりまして、ええ。
なんか、あの有名な青学と日にちが被ってるにもかかわらず、クオリティーに雲泥の差が出ております。 （ブログ, 027）

3.3.3 「フィラー」の役割

最後に、電子媒体における「フィラー」の談話上の役割に着目して分析を行う。本稿の調査において少なからず参考にしている山根(2002)では、前章でも触れた通り、音声発話に現れるフィラーの中心的機能[12]として、「話し手の情報処理能力を表出する機能」「テクスト構成に関わる機能」「対人関係に関わる機能」の 3 点を提示している。ここで本稿が対象とする「フィラー」を山根(2002)の分類に当てはめて考えると、話者同士の時空間の共有を前提としない電子媒体上の発信では、基本的に「話し手の情報処理能力を表出する」（＝とりたてて対他的な側面を持たず、半ば非意図的に現れる）語は現れないことが推測される。実際、本稿の調査で見られた「フィラー」は、(13)に示す 1 例の例外[13]を除き、ほとんどの語が残る「テクスト構成に関わる機能」か「対人関係に関わる機能」を意図して用いられたと考えられるものであった。

---

[12] なお、山根(2002)では講演・実際の対話などそれぞれの場面の調査で「フィラーの役割」として提示したものを、最終的に「フィラーの機能」としてまとめており、「役割」という術語と「機能」という術語を特に使い分けていないことが読み取れる。本稿も基本的にこの立場に従う。
[13] 但し、(13)の「なんやろ」（「なんか」の異形としてカウント）も、「心内において情報の処理が遅れている」ということを示すことで相手の関心を誘う談話展開上の方略であると考えられ、意図的に使用された「フィラー」である可能性は高い。

(13)（共通の友人に恋愛相談をしたという話題において）
B：聞き出し上手なのかもね
B：A の恋バナ聞いたことないね！！
A：ほんと上手やった…
　見習いたい…（。>A<。）
　恋バナというか…なんやろ…そこまでいってないというか（笑）
B：まじか（笑）
　気になるんだけど！！　（LINE, 009）

但し、本稿の調査結果からは、ともに電子媒体である LINE とブログでも「フィラー」が談話上で担う役割・機能は一様ではないことが窺えた。具体的には、LINE では特に「対人関係に関わる機能」を意図して「フィラー」が用いられやすく、ブログでは特に「テクスト構成に関わる機能」を意図して「フィラー」が用いられやすいことが推測される。以下、前項までで見た「フィラー」の種類及び出現位置を踏まえ、それぞれの媒体で観察された実例を取り上げる。

まず、LINE では「フィラー」の位置として最も多く観察されたのが発話頭であり、前項でも示した通り、出現全体の約 7 割（67.7%）を占めていた。また、発話頭に限った場合、出現が多い語として、「え」（36 例／発話頭全体の 18.7%）と「まあ」（28 例／発話頭全体の 14.5%）、「あー」（27 例／発話頭全体の 14.0%）が挙げられ、これらの合計は発話頭全体の約 5 割（47.2%）に達していた。観察された「え」の例として(14)を、「まあ」の例として(15)を、「あー」の例として(16)をそれぞれ挙げる。

(14)（アルバイト先で行う催しについて）
A：そおそお。。！笑うらめしやてんとかそういうの
A：やるんだよ
A：笑笑笑
B：え、うらめしいの？笑
A：うらめしや一展　（LINE, 002）
(15)（アニメとゲームの市場規模が縮小していることについて）
B：人を惹きつけるものを出せない奴らが悪い
A：それもあるかもな

B：まあゲームは仕方ない　スマホ人気が強すぎる
A：日本人働きすぎやからな　（LINE, 023）
(16)（就職活動について）
B：専門学校だと専門性があるもんねえ
A：建機は結構内定貰いやすいみたい
B：あー、なんか需要ありそうだもんなあ、、　（LINE, 004）

(14)(15)(16)からもわかる通り、発話頭に出現する語は基本的に相手の直前の発話を受ける形で示されるものであり、前文脈を受けた上で、後続する自分の発話がどのような態度で示されるものであるのか表示する役割・機能を持っていると考えられる。実際の会話において、相手の発話への共感や納得、あるいは発話を受けての心情の高まりなどを表出するフィラーが多く見受けられることは山根(2002)の調査でも指摘されているが、後続する文のみでも伝達したい命題内容が十分に表されていることや、話者同士が物理的空間を共有しない文字によるやりとりであることを考慮すると、LINE 上の談話においてそのような「フィラー」は必須とは言い難い。それにも拘らず、多くの「フィラー」が心的態度の表出に用いられていることからは、そうすることが一種のコミュニケーション上の丁寧さにつながることが示唆される。

また、本稿の調査では LINE における「フィラー」の出現位置として発話頭の次に数の多い文頭においても、多くの例で発話頭同様の特徴が観察された。2000 年代以前の IRC(Internet Relay Chat)を対象とした Werry(1996)や、近年の LINE に関する論考である西川・中村(2015)でも言及がなされる通り、テキストチャットでは(17)のように複数の話題が極めて独立した形でしばらくの間同時に進行することがあるが、本稿の調査における文頭の「フィラー」のうち、37 例（文頭全体の 56.1%）は(17)における A4 の発話に含まれる「えー」のように、複数の話題が並立する際の、先頭の話題以外の冒頭部で使用されるものであった。実際の会話では基本的に一度に一件の話題しか進行しないことを考えると、LINE におけるそのような出現例もほぼ発話頭の「フィラー」と同様のものとして分類できる。従って、LINE 上の「フィラー」のうち、約 8 割(発話頭全数+文頭の一部／80.7%)は相手の発話を受け、何らかの心的態度を表出するものであり、山根(2002)に基づけば、「対人関係に関わる機能」に偏る傾向があると言える。

(17)（前日の様子を写した動画について｜Dが金沢にいることについて）[14]
D1：昨日の動画見るとうるさすぎる（泣き顔を示す絵文字）
A1：Dがな笑笑
A2：金沢ついたー？
D2：黙ることにしよう、、
D3：うん！
　　けど疲れたから今日はゆっくりして明日から観光する（笑）
A3：Dちゃん可愛かったからよし
A4：えーいいね（ハートマークを示す絵文字）　（LINE, 031）

一方で、ブログでは、少なくとも記事の文面を書いている時間における情報伝達は話し手（書き手）から聞き手（読み手）への一方向であるため[15]、相手の発話を受ける形で用いられる LINE 上の「フィラー」とは異なる役割で用いられる「フィラー」が多いことが推測される。実際、本稿で収集したブログ上の「フィラー」のうち、数の多い文頭及び文末の出現例（出現全体の 81.1%）を詳細に見ると、(18)(19)(20)のように、記事内における特定の話題の導入や転換、総括といった内容に連接するものが多かった。そのような「フィラー」の記事全体における出現位置としては、記事の始発部(18)、段落の冒頭及び末尾(19)、記事の終結部(20)に集約される様子が窺える。

(18)（自転車競技のイベントに参加してきたことについて）
　えー、お疲れ様でした。
　今年もさいたまクリテ終わりました。
　去年に引き続き、レースをチラ見する程度で終わってしまった…笑
（【話題の導入】／ブログ, 031）
(19)（ライブに行ってきたことについて）
　前日は夜中の3時まで（人名）さん達と飲んでた笑
　ハロプロの話やら生田について語ったり生田ヲタの話をして楽しかった www

[14] なお、(17)では D1-A1-D2-A3 の発信で「前日の様子を写した動画について」言及がなされるやりとりがなされており、A2-D3-A4 の発信で「Dが金沢にいることについて」言及がなされるやりとりがそれぞれ独立した形式でなされている。
[15] 3.1 で述べた通り、ブログにおいて書き手（話し手）は他者（例として、その記事にコメントを行う者）を想定して発話を展開していると思われる。但し、記事を作成する段階においては、そのような他者からの明確なレスポンスを得ることはできない。

まぁそれは置いといて(o_ _)o　　（【話題の転換】／ブログ, 036）

(20)（留学中に知り合った学生をナイアガラの滝に案内したことについて）
彼にアメリカ滝を案内している時にふと思ったことが
『もう飽きたわナイアガラに』
飽きたんです、はい。　　（【話題の総括】／ブログ, 169）

また、話題の区切り目を示しておらず、出現位置としてもひとつの話題が展開していく途中に挿入される文頭・文末の「フィラー」では、(21)及び(22)のように何らかの心情を演出するものが多数確認された。これらは LINE における「フィラー」と共通する性質を持つと思われるが、LINE 上の「フィラー」が他者の反応を受ける位置における出現に偏る傾向があったのに対して、ブログにおけるそのような「フィラー」はすべて、心情描写・回想・セリフなど、いわゆる「地の文」と異なる内容や文体への／からの移行地点で用いられていた[16]。従って、それらも発話の境界を示すという点では話題の導入・転換・総括を示す「フィラー」と共通するものと捉えられる。

(21)（ゲームの結果について）
それに報酬諸々が加わって、
こういう結果になりました。
うーん、しょっぱい ww
当たればラッキーの精神でやってましたけど、それでも人間期待しちゃうもんですよねー。　　（ブログ, 099）

(22)（エントリーシートの書き方を大学で教わったことについて）
昔は手書きだったので、字の方に自信がある私はそれの方がいいのですが、最近では全部打つんですね笑
いやぁ、ほんと昨日まで就活なんてなんとかなるさぁーみたいなこと言ってた私殴りたい
変な自信は一気になくなりました笑　　（ブログ, 199）

なお、以上で見たような話題の導入・転換・総括を示す「フィラー」と心情描写・回想・セリフなどへの／からの移行を示す「フィラー」は、本稿の調査において確認

[16] このような「フィラー」の出現環境は野田(2006, 2014)で指摘される「疑似独話」（他者を意識した独話的発話）と共通するものであると考えられる。

されたブログ上の文頭・文末の「フィラー」全体の 90.0%（89 例）[17]に達する。これは、位置を問わない「フィラー」全体を考えた場合でも 73.0%に及ぶものであり、山根(2002)に基づけば、「テクスト構成に関わる機能」に偏る傾向があることを示すと言える。また、調査結果及び 3.3.1 で見たようにブログ上の「フィラー」の種類がほかの媒体（特に実況動画）に比べて限られることを考慮すると、すべてのフィラー（「フィラー」）が発話境界を示せるわけではないことも示唆される。

4. 考察

前章では、LINE とブログ、実際の会話、実況動画の各データを対象に調査を行い、電子媒体において文字で書かれる「フィラー」が文頭・発話頭の位置での出現に偏ることや、LINE では「対人関係に関わる機能」で、ブログでは「テクスト構成に関わる機能」で、それぞれ「フィラー」が用いられやすいことを示した。本章では、前章を踏まえ、個別の語に着目して電子媒体における「フィラー」の特徴と必要性を考察する。特に、ケーススタディとして、電子媒体で「まあ」が頻出する背景を検討する。

4.1 電子媒体における「フィラー」の特徴について

前章において LINE 及びブログで観察された「フィラー」の種類を今一度振り返ると、最も多く出現が確認された語は「まあ」であり、LINE では「フィラー」全体の 18.6%、ブログでは「フィラー」全体の 38.5%をそれぞれ占めていた。対して実際の会話と実況動画では、前者で 5.0%、後者で 15.5%であったことを踏まえると、「LINE-実際の会話」と「ブログ-実況動画」のどちらのペアにおいても、電子媒体の方が遥かに「まあ」の割合は高いと言える。ここでは、そのような実態の背景について、「フィラー」の担い得る役割・機能の範囲という点から考える。

まず、前章で見たように、LINE では相手の発話を受け、後続する内容がどのような態度で示されるものであるのか表示する役割・機能で用いられる「フィラー」が多く観察された。また、特に「まあ」の出現例では(23)のような「譲歩」や(24)のような「共感」の文脈で用いられるものが典型的に見られた。

---

[17] 筆者の見立てでは、文頭・文末で話題の導入・転換・総括を示す「フィラー」は 59 例、心情描写・回想・セリフなどへの／からの移行を示す「フィラー」は 30 例確認された。但し、前者の中には後者の要素を兼ねているものもあり、判断にはやや揺れが生じる可能性がある。なお、どちらにも分類できない例外は 5 例見られた。

(23)（教育実習先の学校の教員の性格について）
A：恩師だからがさつさわかってたけど
A：知らん人だったら爆発してた
C：がさつすぎな笑
（中略）
A：まあ、熱い先生だからありがたいよ　（【譲歩】／LINE, 026）
(24)（授業の履修について）
A：私は卒業できるギリギリを狙おうかな
B：まあふつーに考えてあれ全部は取りたくないよなあ　（【共感】／LINE, 007）

一方で、ブログでは個々の話題や、「地の文」とそれ以外の文の境界を示す「フィラー」が多く観察されたが、それらのうち「まあ」の出現例では(25)のように特に話題の総括を行う文脈で現れる例が典型的に見られた。

(25)（中間テストに向けた準備が不安であるという話題において）
もうすっかり寒いし
若干ひきこもり始めてる笑
まあなんとかなりますよーに　（【話題の総括】／ブログ, 104）

実際の音声発話において「まあ」が「対人関係に関わる機能」と「テクスト構成に関わる機能」のどちらも担うことができることは川上(1993, 1994)など、これまでの研究でも既に指摘されているところであるが、ほかのフィラー（「フィラー」）との比較も念頭に置いた場合、(23)(24)(25)にも見られる「まあ」のこのような特徴は一層特筆すべきものであると考えられる。たとえば、音声発話において典型的に「対人関係に関わる機能」を担うと言える「え」や「ふ（ー）ん」といった語は、(26)のように「テクスト構成に関わる機能」を要する文脈では用いにくい。

(26)（ボランティアが大変だったことについて）
終わったあとの解放感はすごい良かった(^○^)
{まあ／#え／#ふーん}、終わったらなんだかんだ楽しかった笑
（【「まあ」の出現例】／ブログ, 007）

また、典型的に「テクスト構成に関わる機能」を担うと言える「はい」や「いやー」といった語も、3.2 において検討の対象外とした肯否を示す例や、明らかなあいづちである例でない限り、(27)のように「対人関係に関わる機能」は示し得ない。

(27)(教育実習先で体育の授業を任されたという話題において)
C：A、運動できそうだもん
A：いやいや
B：ね、たしかに！A 任されそう～
A：{まあ／#はい／#いやー}、体力テストだから
（【「まあ」の出現例】／LINE, 026）

以上を踏まえると、「まあ」の担う役割・機能の範囲は、電子媒体における出現の多さと密接に関わるのではないかという推測が立てられる。特に、「まあ」とは対照的に、電子媒体で極端に割合が減る指示詞由来の語（「こう」「そう」「この」「その」「あの」）について考えると、これらのうち、「対人関係に関わる機能」あるいは「テクスト構成に関わる機能」を担い得るのは、本稿の認定基準の上では(28)のような一部の「あの」及び(29)のような一部の「そう」のみであり、その他の「こう」「この」「その」は電子媒体でほとんど確認されなかった「話し手の情報処理能力を表出する機能」に特化すると言える。このことは、実際場面における音声発話において、それらの出現が(30)のように極端に文中に偏ることからも確かめられる[18]。

(28)（バレンタインデーにチョコを渡したことについて）
C：喜んでくれるだけでキュンとするから大丈夫（親指を立てた絵文字）笑
C：{あの／#こう／#この／#その／#そう}、できれば F 先輩にチョコ渡したのは内密にしていただけると有難いっす…笑　（【「あの」の出現例】／LINE, 028）
(29)（最近遊んでいたゲームについて）
何が”濃い”って、まずダンジョン。

[18] なお、この分析が川田(2008)の指摘（指示詞由来の語は他者指向性が高い）と対立するかどうかについては別途検討が求められる。その理由として、「「あのー」の生起数が圧倒的に多く、その他の「指示詞フィラー」はそれほど多く現れない場合が多いので、比較方法を検討する必要がある」と述べられる通り、同論では個別の語の違いを検討していないことが挙げられる。

（中略）

次に主人公。

{そう／#あの／#こう／#この／#その}、今回のペルソナは主人公が”濃い”のです。

（【「そう」の出現例】／LINE, 134）

(30)（ゲームの攻略に成功しそうな場面で）

あっ、まあ、こうなりますよね。落ち着いて行けば結構行けるってことが判明したので、このー、判明しました。あんな感じになります、落ち着いて行くと。

（【「この」の出現例】／実況動画, 008）

従って、上記のような観察からは、電子媒体で「まあ」が頻出する背景の一端に、ほかの多くの語よりも求められる役割・機能に合致しやすい性質を持つことがあると言える。また、そのことは電子媒体における「フィラー」全般の特徴の導出にもある程度つなげることが可能であると思われる。即ち、電子媒体において文字で書かれる「フィラー」では、これまで言及を行ってきた山根(2002)における 3 点の役割・機能のうち、特に「対人関係に関わる機能」及び「テクスト構成に関わる機能」の範囲でどちらも兼ね得る語の出現が、どちらかの役割・機能しか持たない語に優先し、「話し手の情報処理能力を表出する機能」に特化する語にはさらに優先する、という形で一般化を図れるということである。実際、LINE においてもブログにおいても「対人関係に関わる機能」と「テクスト構成に関わる機能」のどちらかを示す語のみが現れるわけではなく、（数は全体の 3 割に満たないものの）もう片方の機能を持つ語も一定数現れていた。そのような環境下では、役割・機能の側面で汎用的なものが好まれることは想像に難くなく、特に「まあ」は場に適合する形で出現すると言えるだろう。

4.2 電子媒体における「フィラー」の必要性について

続いて、「まあ」の必要性という観点から「フィラー」について考察を行う。前節では、「フィラー」の担う役割・機能の側面から、電子媒体においてより汎用的なものが好まれて用いられるという特徴を示唆したが、「まあ」同様に汎用的に用いられる可能性がある語として、ほかにも「えーと」や「なんか」などが挙げられる。たとえば、「えーと」がしばしば(31)のように相手のことばを受ける役割でも、(32)のように単なる発話上の境界を示す役割でも用いられることは小出(2009)で既に指摘がなされている。また、「なんか」も(33)(34)のように同様の性質を持つことが実例及び川上(1992)の指摘から窺える。それらのうち、特に「なんか」は実際の会話において最も

多く出現するフィラーであり、LINE 上のやりとりにおいて、「まあ」が「なんか」よりさらに多く出現する理由については別途検討の余地がある。

(31)（集合写真について）
F017：へえー、これ、何のあれなの？集まりなの？
F102：えっと、いや、ほかは全部親戚なんですけど。
（あーはいはい）祖母と母と母の姉と私のいとこなんですけど。
(32)（談話の開始部で）
F017：あ、確か鳴る。
プップップッって。
F102：うん。
えっと、早速なんですが、ちょっと隣の本。（(31)(32)は NUCC, 012）
(33)（友達というものは自然に続くものではないことに気付いたと言う F004）
F004：ごめんね、今まで数々の無礼を。
〈笑い〉（数々の無礼）
F139：なんかさ、自分からさあ、こう、行動起こさないとさあ。
（そうそうそうそうそう）消えてくよね。（NUCC, 014）
(34)（所属する大学院に留学生が増えたという話題から将来大学の教員になった場合に関する話題へ移行する場面で）
F029：A 大で就職したらさー、（うん）B ちゃんちとお隣さんとかさー、（うーん）
ありえるわけだよね。
おかしくない？
なんか。（NUCC, 021）

この点に関して、本稿の調査で見られた「まあ」の出現例と「なんか」の出現例では、前者の方がより先行する話題をまとめる際に用いられやすいことが窺えた。たとえば、最も「フィラー」全体あたりの「まあ」の割合が高いブログで、この語が(35)のようにしばしば記事の終結部でそれまでに述べた内容を総括する文脈に出現することは既に述べた通りである。一方で、「なんか」はこのような「まあ」と置き換えにくいことが推測される。実際、話題の総括が行われる場面のみに着目した場合、「なんか」は本稿の調査で確認されなかった（ブログ上の「まあ」では、30 例程度見られた）。

(35)（「他人の恋人の話ほどどうでもいい話はない」と思ったことについて）
とにかくどーーーでもええんじゃ！
まぁ、言いたいことは
恋愛は自己完結させておきたいってこと　（【記事の終結部】／ブログ, 138）

このような実態から、談話レベルで捉えた場合、「まあ」には「なんか」より話題をまとめる性質が強く備わると考えられる。また、この性質はブログにおける「まあ」に限らず、実際の会話や LINE における「まあ」の出現例においても共有されるものであると思われる。前節でも見た通り、LINE における「まあ」の出現例は「譲歩」や「共感」の文脈で典型的に見られたが、それらもメタ的にはそれ以上の発話展開を示さないという点でブログ上の話題の総括と共通した性質を持つ。これは勿論、実際の会話における「まあ」の出現例でも基本的には同様であることが推測される。

但し、以上のような「まあ」の性質を認めた上で、そのような性質の求められる度合を考えた場合、本稿で取り上げた 4 種類のデータではそれぞれで違いがあると思われる。たとえば、ブログにおける発信と実況動画における発話を取り上げると、これらはそのほかの 2 種類のデータ（LINE 及び実際の会話）と比べても、ひとりで内容を展開しなければならない点で総体的に話題を適宜まとめていく必要がある（実際、音声発話のみを比較した場合にも、実況動画における「まあ」の出現頻度は実際の会話より高い）。一方で、ブログと実況動画をさらに比べた場合、前者で語られる内容は既に確定した過去の出来事であることが多い点で談話外の状況が変化しにくい（または変化があっても顕在化しにくい）が、後者では発話の展開と同時に目の前のゲーム画面が変化するという異なりがある。従って、前者では談話外の状況への対処というより自己の発話展開を指向する「まあ」が優先して用いられるのに対して、後者では(36)のように「まあ」以外の単なる「言いよどみ」を表す「えー」や、変化への反応を示す「あ」などほかの語もそれなりに出現してしまうと考えられる。

(36)（ゲーム内の様子を説明する場面で）
ま、そんな感じなんですけど。えーとですね、暴動が起きてるようです。えー、男の人が一生懸命バットで振り回してですね、えー、なんかやってるみたいなんですけど、何をしてるのかはちょっとわかんないですね。あ、あんなに楽しそうに手を振って。わー楽しいですね。　（実況動画, 011）

また、LINE における発信と実際の会話における発話を取り上げると、このペアでは話し手と聞き手という 2 人以上の発話が入り混じることにより、ブログでの出現が少ない外部的な情報を指向する「フィラー」も積極的に表出される。但し、このペアにおいても「ブログ-実況動画」のペア同様、話し手の言語産出がなされる状況には大きな違いがある。たとえば、実際の会話では話し手と聞き手が時空間を共有しているため、談話がいつ途切れるかということや、あるいは質問に対して応答をすぐに得ることができるかということは声の調子、表情、身振り、そのほか談話外の視覚的情報によっても常に知ることができる。一方で、LINE 上のやりとりでは時空間の共有は必ずしも前提条件とされないため、そのような情報は（文字による情報以外からは）得にくい。従って、極端に言えば、LINE では、談話がすぐに途切れる可能性が潜在的にあることが窺える。そのような環境では、3 章で見たような他者の発話に対する丁寧な応答を表出しつつも、一方ではそこで話が途切れてしまっても不自然ではない「まあ」が最も必要な言語形式になり得るのではないかと考えられる。

5. おわりに

本稿では、これまでの先行研究で中心的に検討がなされてこなかった文字で書かれる「フィラー」について、LINE と実際の会話、ブログ、実況動画の 4 種類のデータを取り上げて調査及び分析を行った。その結果、電子媒体（LINE、ブログ）における「フィラー」の出現位置として、文頭・発話頭に偏る傾向があることや、一方で「フィラー」の担う役割・機能に着目した場合、LINE では「対人関係に関わる機能」に、ブログでは「テクスト構成に関わる機能」に、それぞれ特化することが明らかになった。また、考察では電子媒体において出現数が一番多い「まあ」を取り上げ、この語が頻出する背景を検討した。特に、「まあ」の役割・機能がほかの「フィラー」に比べて汎用的なものであることや、話題をまとめる性質を持つことに着目して議論を行い、LINE と実際の会話及びブログと実況動画のそれぞれのペアにおける言語産出の状況を考えた場合、電子媒体では総体的にこの語が最も求められることを述べた。

本稿の調査・分析からは同じく文字で書かれる「フィラー」であっても、実際の音声発話におけるフィラー同様、発話がなされる環境によって出現のあり方が変わることが示唆される。また、その背景には個別の語が持つ性質も深く関わることが推測される。本稿では、LINE とブログといった限られた媒体を対象とし、個別の語につい

ても「まあ」のみを中心的に取り上げたが、今後より多様な媒体、語について分析を広げることで、書かれる「フィラー」を体系的に捉える必要があると思われる。

付記　本稿は第150回関東日本語談話会における研究発表に大幅な加筆・修正を施したものである。当日、有益なコメントを下さった諸先生方に改めて感謝を申し上げたい。なお、発表を論文としてまとめるにあたり、調査対象となるデータを大幅に差し替えた上、考察も異なる内容を多く加えた。従って、発表時とは個々の数値や分析が異なる点も少なくないことをご了承いただきたい。

参考文献

大工原勇人（2010）「日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究―フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて―」神戸大学大学院博士論文

藤村逸子・大曽美恵子・大島ディヴィッド（2010）「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子・滝沢直宏編『言語研究の技法：データの収集と分析』ひつじ書房 pp.43-72

石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋（2009）「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12　一橋大学留学生センターpp.73-85

川上恭子（1992）「談話における「なにか」について」『園田国文』13　園田学園女子短期大学国文学会 pp.73-82

川上恭子（1993）「談話における「まあ」の用法と機能（一）―応答型用法の分類―」『園田国文』14　園田学園女子短期大学国文学会 pp.69-78

川上恭子（1994）「談話における「まあ」の用法と機能（二）―展開型用法の分類―」『園田国文』15　園田学園女子短期大学国文学会 pp.69-79

川田拓也（2008）「ポスター会話におけるフィラーと視線の同期について」『京都大学言語学研究』27　京都大学大学院文学研究科言語学研究室 pp.151-168

岸本千秋（2005）「ネット日記における読み手を意識した表現―公開意識との関連から―」三宅和子・佐藤彰・岡本能里子編『メディアとことば』2 ひつじ書房 pp.204-231

小出慶一（2009）「「えーと」再考―談話運営という観点から―」『埼玉大学紀要　教養学部』45-1　埼玉大学教養学部 pp.45-57

小磯花絵・間淵洋子・西山賢哉・斎藤美紀・前川喜久雄（2004）「転記テキストの仕様 Version1.0」『日本語話し言葉コーパス』Disk1

西川勇佑・中村雅子（2015）「LINE コミュニケーションの特性の分析」『東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル』16　東京都市大学環境情報学部情報メディアジャーナル編集委員会 pp.49-59

野田春美（2006）「疑似独話が出現するとき」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 2　文論編』くろしお出版 pp.193-213

野田春美（2014）「疑似独話と読み手意識」石黒圭・橋本行洋編『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房 pp.57-74

野村美穂子（1996）「大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語―「フィラー」に着目して―」『文教大学教育研究所紀要』5　文教大学教育研究所 pp.91-99

定延利之（2002）「「うん」と「そう」に意味はあるか」定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房 pp.75-112

定延利之（2005）『ささやく恋人、りきむレポーター　口の中の文化』岩波書店

定延利之・田窪行則（1995）「談話における心的操作モニター機構―心的操作標識「ええと」と「あの（一）」―」『言語研究』108　言語学会 pp.74-93

佐竹秀雄（1980）「若者雑誌のことば―新・言文一致体―」『言語生活』343　筑摩書房 pp.46-52

塩沢孝子（1979）「日本語の Hesitation に関する一考察」F.C.パン編『ことばの諸相』文化評論出版 pp.151-166

冨樫純一（2001）「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』6　筑波大学人文社会科学研究科日本語学研究室 pp.19-41

Werry, C.C.（1996）Linguistic and interactional features of Internet Relay Chat. In S.C. Herring(Eds.), Computer-Mediated Communication: Linguistic, Social and Cross-Cultural Perspectives, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp.47-63

山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

山下暁美（1990）「話し言葉におけるいわゆる“無意味語”」『講座日本語教育』25　早稲田大学日本語研究教育センターpp.108-118

おちあい　かなと／人文社会科学研究科

（2017 年 10 月 15 日受理）